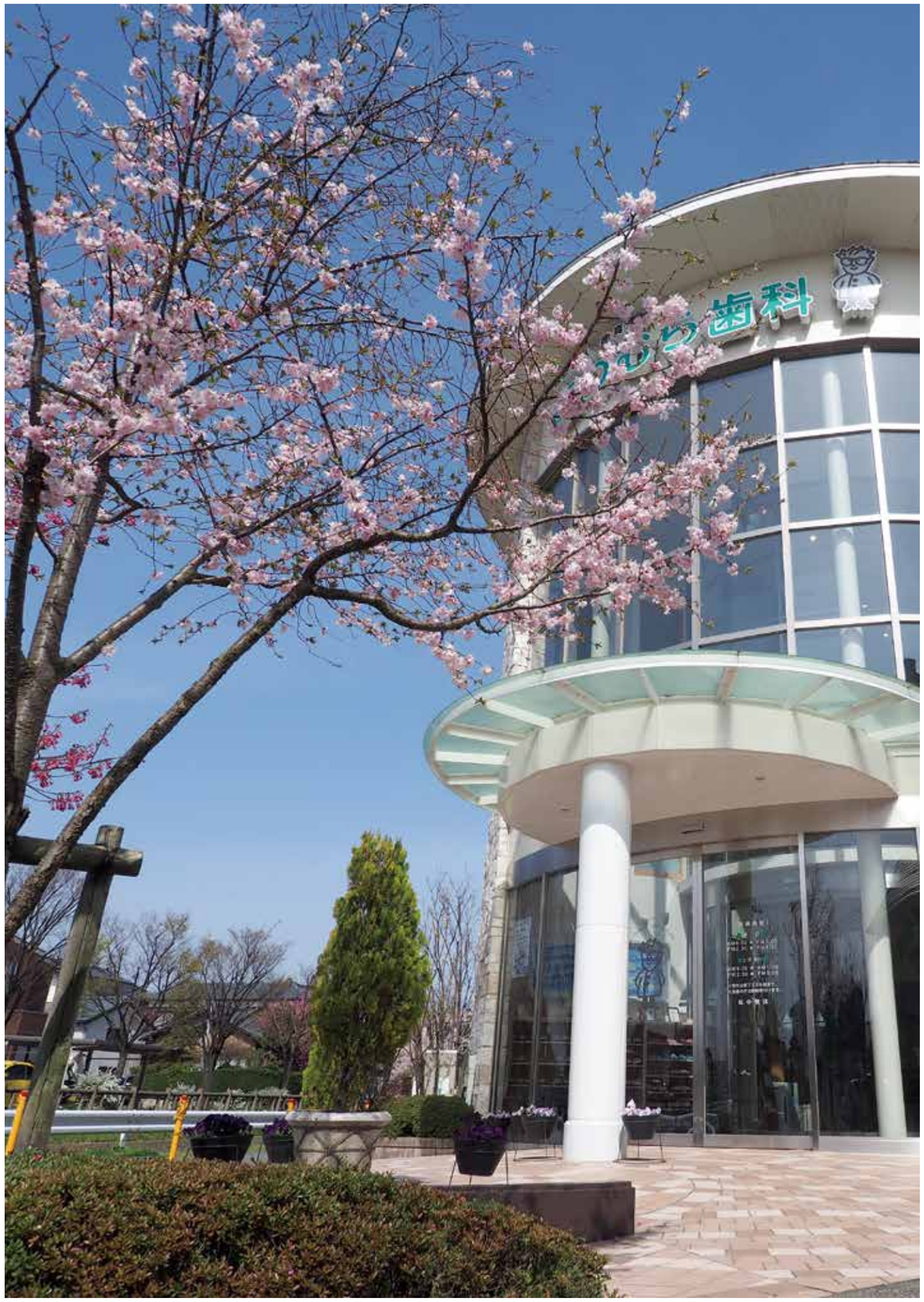


撮影場所：まつむら歯科 新津診療所

# 「予兆」

道 実 践 徳

Vol. 28

「予兆」という言葉が有ります。
いわゆるこれから起こる事の兆を予め暗示する兆候という意味ですが、最近の内外に起こっている事のほとんどは、何か将来の大きな災いの予兆の様に感じるのは私一人ではないと思います。

人も組織も国家も、衰退や滅亡というものの原因は、外に有るのでは無く、その内に有るという事を、我々はもっと気付く必要が有ると思います。
そして、こうした災いの予兆は、歴史的にみても大衆迎合、いわゆるポピュリズムの台頭に見られる様に思います。
一見耳ざわりの良い、近視眼的にみると、甘い蜜の味の様な感じがポピュリズムにはあります。しかし中長期的にみて、その事が人や組織や国家の、人間力、組織力、国力を弱退化してしまう事に気付いた時は、もはや遅いという事が多いものです。

戦後、まともな道徳教育を学校で教えなくなって久しくなりますが、かつて日本には道徳的人心荒廃の問題が起こり、それを道徳教育の振興・充実によって克服していった時代が有りました。
明治という時代です。
そしてその模範となったのが二宮金次郎（尊徳）【1787 年～ 1856 年】という人物でした。
薪を背負って読書をする少年の像を覚えている人も多いと思いますが、かつて全国の小・中学校には必ずこの像が有りました。

尊徳が生まれたのは天明 7 年（1787 年）の江戸後期で、あたかも文化・文政の高度成長時代の反動の様に、飢餓や天災が起こり、社会矛盾が顕在化する時代でした。
尊徳は 14 歳で父と、16 歳で母と死別し、一家離散という艱難な境遇の中で育ち、勤労と分度を守る実践の積み重ねの中から家を再興し、後に小田原藩の財政建て直しをはじめ、6 百余村の農村復興を行なった実践の指導者でした。
したがってその教えは、机上の学問ではなく実行を尊ぶものでした。
尊徳は「わが教えは実行を尊ぶ。経文といい経書といい、その経というのは機の経糸の事だ。
されば経糸ばかりでは用をなさぬ。横に日々の実行を織りこんで初めて役に立つものだ。
ただ経糸ばかりでは益の無い事は説くまでも無い」と言っています。

尊徳はその人生経験と独自の発想をもとに「報徳」の教えを作り上げました。
「大自然の恵みに感謝しながら、自分が信じた事を力いっぱい行なうことが、本当に豊かな社会を作る」
という信念の中で四つの実践原理を説いています。

**1、至誠：うそいつわりの無い良心**
**2、勤労：自分や地域の向上の為に自分にできる仕事に謹しむこと**
**3、分度：自分の置かれた状況や立場にふさわしい生活をおくる事**
**4、推譲：分度によって生まれた力と金を自分の将来と社会に譲ること**
がそれです。

そしてまた「報徳訓」には

**父母の根源は天地の令命に在り**
**身体の根元は父母の生育に在り**
**子孫の相続は夫婦の丹精に在り**
**父母の富貴は子孫の勤功に在り**
**吾身の富貴は父母の積善に在り**
**子孫の富貴は自己の勤労に在り**
**身命の長養は衣食住の三に在り**
**衣食住の三は田畑山林に在り**
**田畑山林は人民の勤耕に在り**
**今年の衣食は昨年の産業に在り**
**来年の衣食は今年の艱難に在り**
**年々歳々報徳を忘るべからず**

と説いています。

農業が国の基幹産業の時代であったとはいえ、その基本となる考え方は今日でも何ら変わらぬ基本原理だと思います。
かつて昭和末から平成初めの頃、日本はさかんに「ゆとり」という言葉がトレンドの時代でした。
しかし、その「ゆとり教育」と称する教育を行なった結果はどうだったでしょう。
皆がその失敗を認めたのは、ついこの前の事だったと思います。
そしてその「ゆとり教育」を声高に主張していた人達の一体誰がその非を認め、社会に謝罪したでしょうか？
今また「働き方革命」「一億総活躍社会」といった耳障りの良い言葉が先行しています。
本当に日本人は働き過ぎの国民なのでしょうか。
世界 35 ヵ国平均労働時間ランキングにおいて日本は 15 位で、1,745 時間でしかありません。
1 位のメキシコ 2,226 時間、2 位韓国の 2,163 時間よりはるかに少ない時間です。
では、生産性はと言うと 1 人当たりの GDP ランキングでは 23 位でしかなく、1 位のルクセンブルク 111,162 ドルと比べ、その約 1/3 の 38,492 ドルでしかありません。

確かに時代と共に働き方は多様化していっても良いと思いますが、画一的にそれを強要するのは問題が大きい気がしてなりません。

今日の日本において本当に大切な事は、皆が自分の仕事や学業に、しっかりとした目的と目標を持ち、自発的に努力して力をつける事ではないでしょうか？
そうした人達が増えてゆく事こそが、真に社会を豊かにし、民度の高い国家にしてゆく事につながる事だと思います。
そして、それは決して一朝一夕に成る事では無く、そうした価値観を大切にする社会の中で、長い時間をかけて育みながら結実してゆくものだと思います。

浮ついたトレンドに流されない、まさに不易の原理を大切にしたいものです。

徳真会グループ
代表　松村 博史